

日銀の視点

先日、初めてテレビ局の取材を受けた。テーマは「米中貿易摩擦が茨城県経済に及ぼす影響」。記者の質問に答えて

①米国の保護主義的な政策や中国景気の減速は両国向けを主力とする県の輸出動向に影響が及びかねない②貿易摩擦が高じて米国や中国の景気が失速すれば世界経済全体に波及して県内景気への影響も大きいとコメントした。

後日、放映された番組をビデオに収め、家族に見せた。

日本銀行 吉田 豊
 水戸事務所 長

破顔一笑で難局打開を

息子から「お父さんテレビに出たんだ、すごいね!」と言われ気を良くしていたら妻からはこう言われた。「大変なことが起こるかもしれないって話をしているのに、あなた笑いすぎじゃない?」。言わ

恩師に教えてもらった「破顔一笑」。いつからか口角を上げて人に話し掛けるのが癖となった。これまでも「いつもにこやかですね」とか、「楽しんでお話しされますね」と言われたことがあるが、こ

のようだと思っている。こちらから強く打ち出せば、壁に当たったボールも強く跳ね返ってくる。打った方向が曲がっていけば自分のところにボールは返ってこない。長く安定してラリーを続けるためには壁までの距離を踏まえた適度な強さで、真っ

考え方が理解され、ひいては打開に通じる糸口が見いだされることもあったように思う。口角を上げて話す癖には、このような効用もある。

最近国内外のさまざまな場面で分断と対立が先鋭化している。そうした様子が連日のように報じられているが、強いボールを打ち込むだけではラリーは続かない。時に感情を制し、冷静な構えが必要だ。ビデオを見た妻からこうも言われた。「あなた、ネクタイの趣味が悪いわ」。それは趣味の悪さではなく、見解の相違である、と思っている。

れてみると、貿易摩擦が景気に与える影響が心配だ、という話を満面の笑みで語っていた。番組を見て違和感を持たれた視聴者もおられたのではないか。これには訳がある。筆者の座右の銘は、小学校の

れも癖のなせる業である。しかし、先のインタビュウのように「場違い」と受け取られることもあるので、気を付けなければと肝に銘じる。

常々、人とのコミュニケーションは「テニスの壁打ち」

つことが必要だ。壁をコミュニケーションの相手方と見立てると、何かしら通じるものがあるのではないか。筆者の経験では、難しい交渉の場面でも、笑顔で接すると穏やかな雰囲気の下で相手の立場や

（第2土曜日掲載）